

日本摂食嚥下リハビリテーション学会 eラーニング対応

第6分野

小児の摂食嚥下障害

—Ver. 3

日本摂食嚥下
リハビリテーション学会 編集

e-learning

e6

医歯薬出版株式会社

小児の摂食嚥下リハビリテーションの特殊性、障害の分類と特徴

Lecturer ▶ 弘中祥司¹⁾，田角 勝²⁾

1) 昭和大学歯学部スペシャルニーズ口腔医学講座口腔衛生学部門教授
2) 昭和大学医学部小児科学講座客員教授

学習目標 Learning Goals

- ・ 小児の摂食嚥下における障害特徴が理解できる
- ・ 小児の摂食嚥下障害の症状が原疾患を考慮して分類できる
- ・ 摂食嚥下リハビリテーションにおける小児の特殊性が理解できる

▶ Chapter 1

小児の摂食嚥下リハビリテーションの特殊性

→ (eラーニング▶スライド2)

小児の摂食嚥下リハビリテーションにおける特殊性として、

- ① 摂食嚥下器官が成長発達期にある。
- ② 摂食嚥下にかかわる器官以外の身体の諸器官が成長と機能発達の途上にある。
- ③ 行動，精神心理面が発達の途上にある。
- ④ 発達途上にある小児の摂食嚥下障害の原因となる疾患の特徴を理解する必要がある。
- ⑤ 育児環境を十分理解したうえで，育児的な視点からの対応が必要となる。

という5点を考慮した対応が必要になることがあげられる。また，機能発達の遅滞も大きな要因となる(図1)。

▶ Chapter 1 の確認事項 ▶ eラーニング スライド2対応

- 1 小児の摂食嚥下障害の特殊性を理解する。
- 2 小児の摂食嚥下リハビリテーションの基本概念を理解する。

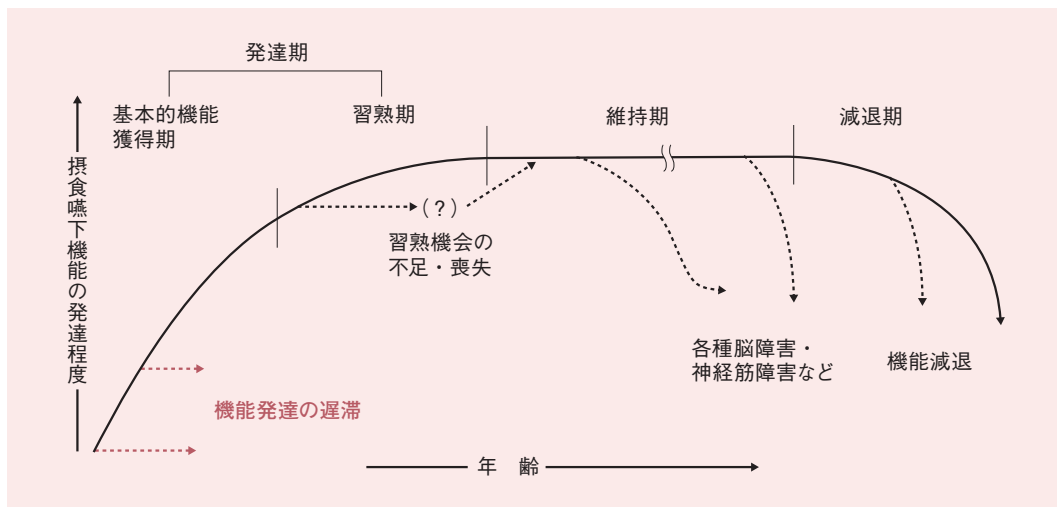


図1 摂食機能のエイジングの各段階と障害発生(金子, 1989. ²⁾を一部改変)

摂食嚥下の 発達と障害

Lecturer ▶ 弘中祥司

昭和大学歯学部スペシャルニーズ口腔
医学講座口腔衛生学部門教授

学習目標 Learning Goals

- 食べる機能の発達過程がわかる
- 食べる機能の障害がどのようにして生じるかがわかる
- 発達期の障害が及ぼす影響がわかる
- 早期に治療を行う理由が説明できる

▶ Chapter 1

摂食嚥下機能発達の8段階 (表1) → (eラーニング▶スライド2,3)

摂食嚥下のプロセスには先行期・準備期・口腔期・咽頭期・食道期の5期が一般的に知られている。しかしながら、成人期の摂食嚥下機能は発達期の学習によって獲得した機能である。そこで、発達期の患者をみる場合には、摂食機能発達の8段階も考慮に入れたアプローチが必要となる。

正常な小児の摂食嚥下機能には八つの段階が知られている(向井, 2000, 表1)。各段階には特徴的な動きがあり、嚥下機能の発達、摂食機能の発達から、手指機能の発達を経て完成する。

Chapter 1 の確認事項 ▶ eラーニング スライド 2, 3 対応

- 1 摂食機能の発達段階を理解する。
- 2 発達期における摂食機能の発達段階評価のポイントを理解する。
- 3 成人期の確立された摂食嚥下機能と、発達期の学習(感覚刺激入力)との関係を理解する。

▶ Chapter 2

機能獲得の流れ → (eラーニング▶スライド4)

生まれもった機能は哺乳動作(反射動作)であるが、外界からの適切な感覚刺激の繰り返しによって合目的な機能発達がなされる(参照▶eラーニング)。

Chapter 2 の確認事項 ▶ eラーニング スライド 4 対応

- 1 機能獲得の流れを理解する。

構造的異常〈唇顎口蓋裂、ロバン シークエンス (連鎖)を含む〉

Lecturer ▶ 舘村 卓

一般社団法人 TOUCH 代表理事

学習目標 Learning Goals

- ・唇顎口蓋裂に伴う摂食（咀嚼）嚥下障害の様相を知る
- ・それらへの対応のための概念を理解する

▶ Chapter 1

裂型と哺乳障害・咀嚼障害 (表1) → (eラーニング▶スライド3)

口蓋裂の分類には種々あるが、摂食嚥下機能からみた分類としては、症候群の一徴として出現する場合（症候性, syndromic cleft）と、cleftだけが単独で発症する場合（非症候性, nonsyndromic cleft）がある。

症候性の場合には、身体他部位、神経筋系、心循環器系、呼吸器系、消化器系においても障害を有するため、口唇口蓋裂の治療だけでは摂食嚥下障害は解決せず、多様なチームアプローチが必要になる。

唇顎口蓋裂に伴う摂食嚥下障害は、二つある。生後直後の哺乳障害と、口蓋形成術の顎発育への影響による咀嚼障害である。裂型によって生じる摂食嚥下障害の程度は多様である。

Chapter 1 の確認事項 ▶ eラーニング スライド3対応

- 1 唇顎口蓋裂の形態を理解する。
- 2 裂型によって、摂食嚥下障害に違いが出ることを理解する。

表1 裂型と哺乳障害・咀嚼障害

唇顎口蓋裂に伴う摂食嚥下障害は、二つある。生後直後の哺乳障害と、口蓋形成術の顎発育への影響による咀嚼障害である。裂型によって生じる摂食嚥下障害の程度は多様である。

裂型の相違			哺乳障害	咀嚼障害
唇裂単独	顎裂なし	片側性	—	—
		両側性	— / +	—
	顎裂あり	片側性	— / +	— / +
		両側性	+	+
唇顎口蓋裂		片側性	++	+++
		両側性	+++	+++
口蓋裂単独			++	+

機能の異常

Lecturer ▶ 田角 勝

昭和大学医学部小児科学講座客員教授

学習目標
Learning Goals

- 小児の摂食嚥下障害において、機能的異常を原因とする疾患について理解し、説明できる
- 基礎疾患や合併症、全身状態を理解し、摂食嚥下障害への対応が説明できる

▶ Chapter 1

小児の摂食嚥下障害の特徴 → (eラーニング▶スライド2)

1) 小児の摂食嚥下障害の特徴

摂食嚥下障害児に対応する際の要点を、以下にまとめた。

- ① 摂食嚥下機能の成長・発育期にある。
- ② 摂食嚥下障害の原因が多岐にわたる。
- ③ 栄養面の評価が必要となる。
- ④ 重症児とそれに伴う合併症が多い。
- ⑤ 年齢や知的能力障害のために、コミュニケーションがとれないことが多い。
- ⑥ 保護者が食事介助の中心になる。

評価や対応は、これらをふまえて行うことになる。また、栄養面を評価するのに成長曲線(参照▶eラーニング, 参照▶P.50)を利用し、変化をみる。乳幼児期であれば母子手帳を活用することも大切である。成長・発達のなかでの評価であり、対応も小児の発達を引き出すことが大切である。

▶ Chapter 1 の確認事項 ▶ eラーニング スライド2対応

- 1 小児における摂食嚥下障害への評価、対応に際しては、発達、原因・病態、重症児の特徴、社会的要因を考慮する。
- 2 小児における摂食嚥下障害の特徴を理解する。

▶ Chapter 2

摂食嚥下障害の基礎疾患の理解 → (eラーニング▶スライド3)

摂食嚥下障害を考えるには、摂食嚥下障害の病態、摂食嚥下機能の発達段階、摂食嚥下障害の基礎疾患を理解する必要がある。ある一面のみをみることで正しい評価ができず、全体と細部の両方をみる力が必要である。

さまざまな疾患により起こる病態についてその基本を理解し、摂食嚥下障害をもつ児と向き合うことに役立てるようにしたい。表1に小児の摂食嚥下障害の原因となる基礎疾患を掲げる。実際は複合的な要因によることも多い。基礎疾患、合併症と全身症状態への対応と同時に摂食嚥下障害を考える必要がある。

評価・介入

Lecturer ▶ 綾野理加

昭和大学歯学部
小児成育歯科学講座兼任講師

学習目標 Learning Goals

- ・小児の摂食嚥下障害の評価および摂食機能療法を理解する

▶ Chapter 1

小児の摂食嚥下機能評価と摂食機能療法実施にあたって

→ (eラーニング▶スライド1,2)

小児の摂食嚥下障害は、患者の主疾患のみならず、感覚運動体験不足や環境などが機能の獲得を阻害する要因となる。評価にあたっては、食事にかかわる内容はもちろんのこと、現病歴、全身状態も保護者、療育者から聴取する必要がある(図1)。

実施にあたっては、摂食機能の発達段階を理解すること、対象児の食べる動きをよく観察すること、保護者や養育者の協力を得ること、摂食嚥下機能のみならず、小児の発達や環境を理解することが重要である。小児患者は成人患者と異なり摂食機能の獲得途上にあり、機能を獲得するにあたって、さまざまな面で保護者など患児にかかわる大人の協力が不可欠となる。また、かかわる大人が摂食嚥下について十分に理解し実施することが重要である。特に食事がすべて訓練によってなされるようなことは避け、日常の食事のなかに訓練を取り入れるようにする。

▶ Chapter 1 の確認事項 ▶ eラーニング スライド 1, 2 対応

- 1 小児の摂食嚥下障害に対する評価、介入の流れを理解する。
- 2 小児の摂食嚥下障害に対応するとき、機能のみならず発達状況や環境を理解する。

▶ Chapter 2

評価

まず、問診によって保護者や養育者から患児の現病歴、摂食にかかわる既往歴、摂食等の現状を聴取する。

1) 摂食にかかわる既往歴 → (eラーニング▶スライド3)

経管栄養、哺乳、離乳食について、いつからいつまで行ったか、指しゃぶり、おもちゃしゃぶりがみられていたか、現在も行っているかななどを聴取する。

2) 摂食などの現状(表1) → (eラーニング▶スライド3)

経口摂取の有無、摂食姿勢や介助の有無など、摂食状況の現状について評価する。また、粗大運動能や全身の緊張状態、身長、体重、生活リズムなどについても聴取しておく。